

甲府の歴史

― 市域の発展を中心として ―

磯貝正義

一九四六（昭和二十一）年六月、筆者は戦禍の跡もまだ生々しい甲府駅頭に降り立った。甲府は初めてだったので、いろいろな目に付くことが多かったが、何よりも驚いたことは、駅前のバス・ターミナルに発着するバスの多いことであった。ここを拠点に県内各地を結ぶバス網の四通八達の状態はまさに壮観で、文字通り「すべての道は甲府に通ず」の観があった。今まで他で見たことのない光景であり、政治・経済・社会・文化、すべての面で甲府市が山梨県の唯一の中心都市である事実を改めて強く印象づけられた。その甲府市が本年七月、市制施行満百年を迎えたので、この機会に甲府の町の生立やその後の発展の概略を、「甲府」の地域的広がりを中心に述べて見たい。

甲府市域には古くから人々が住んだが、「甲府」の地名が生れるのは、武田信虎が永正十六年（一五一九）に居館を石和（館跡は甲府市川田町）から躑躅ヶ崎^{つじがさき}の地（甲府市古府中町）に移し、ここを領国経営の根拠地としてからである。その間の経緯は『高白斎記』が、「同月十五日、新府中御歟立テ初ム、同十六日、信虎公御見分、

同十二月廿日庚辰信虎公府中江御屋移リ」と簡明に叙述し、『勝山記』もこの年の条に「甲州府中ニ一国大人様ヲ集リ居結レ、上様モ極月移リ御座シテ、御台様モ極月御移」と述べる通りである（『甲府市史』史料編一、史料二一六）。「府中」の語は、一般的には古代に国府が置かれた地に解されているが、この場合は中世における守護の治所の意味である。「新府中」とあるから、石和時代に府中の語がすでに用いられていた可能性も考えられる。「甲府」は「甲斐府中」（甲州府中）の略で、駿府・防府等と同じ用例であるが、この場合は駿府の例になつたものであろうか。『高白斎記』には早くも翌十七年の条にこの名が現れるが（同史料二一七）、確実な史料としては、信虎の駿河退隠直後、天文十年（一五四一）九月二十三日付の今川義元の武田晴信宛書状の宛名に「甲府江参」とあるのを挙げるべきであろう（同史料二六〇）。他国からも「甲府」の名が認知されたことを示している。信虎は移館の翌年、積翠寺丸山に要害城を築いて防禦施設とした。城下町の建設もまた信虎によって着手された。戦国期の甲府城下町については、本誌第二号に飯沼

賢司氏による詳細な研究があり、これを批判したなかざわ・しんきち氏の論考が第三号に載っているので参照していただきたい。

こうして甲府は、武田信虎・晴信（信玄）・勝頼三代の治所として栄えたが、天正九年（一五八一）暮れに勝頼が新府城（韮崎市）に移ったため、一時廃棄された。しかし翌年三月に武田氏が滅亡すると、徳川家康は領国支配の中心地として甲府を選び、新城の位置を一条小山と決定し、城代平岩親吉に命じて構築に着手させた。ここは独立の小丘陵で平地に囲まれ、また西方に荒川の流れを控え、時代の要請である居館と政庁と要塞の機能を併せもつ平山城を築くには最適の地であった。家康が山に近くて狭隘な躑躅ヶ崎を捨てて、一条小山を取ったのは賢明な選択であった。しかし工事は中断され、天正十八年（一五九〇）の家康の関東移封後入部した豊臣方の加藤光泰、浅野長政・幸長父子らによって、ようやく城郭もほぼ完成し、城下町も整備された。武田時代の城下町が、一条小山にあった一蓮寺とその西にあったかと推定される長延寺（光沢寺）を南限とするのに対し、新しい甲府はここを中心とするものであった。新城下町の基本プランは「内城」（甲府城）を中核とし、その外側に「内郭」、そのまた外側に「外郭」を置いて堀によって区画したもので、「外郭」と堀の外側の「郭外」の町々といわゆる市街地で町人の居住地であった。下府中と上府中の南北二区から成り、上府中は武田時代の城下の南半分を整備したものであるが、武田館跡を含む北半分は「古府中村」として城下の外に置かれた。なお上府中は二十六町、下府中は二十三町であったが、人口は圧倒的に下府中が多かった。新城下町の南限が、ここでも築城の際現在地に移された一蓮寺と光沢寺であったことは興味深い。

城下町甲府は、明治維新後新生山梨県の県都に生れ変わることになるが、この間明治二年（一八六九）七月二十八日、甲斐府は甲府県と改称され、同四年十一月二十日に山梨県が誕生するまで、「甲府」が県名に使用される時期があった。一八七八（明治十一年）年、郡区町村編制法に基づき、旧四郡を分けて九郡としたが、甲府五十九町と周辺十五村をもって西山梨郡を建て、郡役所を甲府常盤町に置いた。常盤町は旧幕時代の「内郭」を市街地とした際に生れた十二の町の一つである。

一八八九（明治二十二年）年七月一日、前年公布された市町村制に基づき、甲府総町・上府中総町・西山梨郡飯沼村・稲門村が合併して甲府市が誕生した。戸数六八五五戸、人口三万一二八人であった。飯沼・稲門両村には、近世正式な町数には加えないが、武家屋敷や与力・足輕らの組屋敷が置かれてできた町や寺の地内町、それに甲府と一体化しつつあった周辺の村々が含まれていた。これ以後ほぼ半世紀間、甲府市域に変化はなく、甲府市は専ら都市形態の整備に努めた。また一九五一（昭和二十六）年に富士吉田市が誕生するまで六十余年間、甲府は県下唯一の市であった。

一九三七（昭和十二年）年から二十年足らずの間に、甲府市域は飛躍的に拡大した。この年八月一日、西山梨郡里垣村・相川村・中巨摩郡国母村・貢川村を合併したが、相川村には旧古府中村が含まれており、「甲府」発祥の地がようやく甲府市域に編入された。次いで五年後の一九四二年四月一日、西山梨郡千塚・大宮両村を合併した。一九四五（昭和二十年）年七月六日夜半から七日未明にかけてのアメリカ空軍による空襲によって、甲府は壊滅的な打撃を受けたが、戦後の十年間は戦災復興と都市化促進の時代であった。一九四九

（昭和二十四）年十二月一日と、一九五四年十月十七日と、二度にわたって西山梨郡の全域と中巨摩郡の一部とを合併し、ほぼ今日の市域が定まった。これ以後三十余年間、隣接町村との一部境界の変更はあったが、合併は行われていない。この間専ら市民の生活基盤の拡充整備、都市機能の活性化、市民一人一人の福祉の向上等の施策が打ち出されてきた。隣接町村を合併しなくても、共同で施策する分野はますます増大している。市民としての意識も、境界を越えて一体化しつつあるといつてよい。それにしても、全国の都市を襲った地名変更の嵐の中で、甲府市も城下町特有の懐しい町名や、元字のつく武田時代の名残の町名のほとんどを失ったことは残念である。またその不幸な後半生の故に、甲府開創の恩人としての信虎の功績が、余り市民に意識されていないことにも、市民の一人として、また歴史を学ぶ者として責任を覚えざるを得ない。甲府開創四五〇年記念（一九六九年）も、没後四〇〇年記念（一九七四年）も空しく過ぎてしまったが、せめて生誕五〇〇年を迎える一九九四年には何

らかの記念行事があつてほしいと思う。信虎の甲府移館前の館跡も現在は甲府市域内である。

山梨県には現在七市あるが、政治・経済・社会・文化、いずれの面から見ても、県都甲府市への集中度は今日も極めて高く、依然として「すべての道は甲府に通ず」の状況である。それはほぼ同規模の他の県庁所在都市には余り多く見られない現象であり、それだけに甲府市の使命や責務は極めて大きい。文化の面についていえば、市制百周年記念として開始された市史編さん事業も、予定の十五巻中現在すでに八巻を刊行し、数年後には事業を完了する見通しとなった。そのあと、甲府の文化をどのように維持発展させて行くか、文化都市甲府の未来像について、青写真を描くべき時期に至っていると思う。

〔註〕 年代表記は、旧暦時代は年号を主、西暦を従とし、新暦時代は西暦を主、年号を従とした。

（市史編さん委員長）